

【 復活讃詞 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死生、命、爾死降

とき、かみのせいひかりにてぢご
時、神性光地獄

くをころせり。しせしものをちかよ
殺。死者地下

りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復活、天軍皆

よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼日、生命賜主

ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに
吾神、光榮爾

きす。

【 生神女就寝祭のアポリティキオン 第1調 】



しょうしんぢょよ、なんぢはうむときどうてい
生神女、爾産時童貞

をまもれり、ねむるときせかいをのこさ
守、寝時世界遺

ざりき。なあんぢはいのちのははとし
爾、生、命、母

ていのちにうつれり、なんぢのきとうを
 生命移 爾 祈 禱

もってわれらのたましいをしよりのがれし
 以 我 等 靈 死 脱

めたも おう。
 給

【日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調】

こうえいはちちとこ と せいしんにき
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸

す、

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 あ め および

ぜんせ かい の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃに い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

【 生神女就寝祭のコンダック 第2調 】

いま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世

き と う に ね む ら ざ る し ょ う し ん ぢ ょ 、 て ん た つ に
 祈 禱 眠 生 神 女 轉 達

か わ ら ざ る た の み な る も の を 、 ひ つ
 變 倚 望 者 樞

ぎ と し と は と ど め ざ り き 、 け だ し
 死 留 蓋

え い て い ど う ぢ ょ の た い に い り し も の
 永 貞 童 女 胎 入 者

は か れ を い の ち の は は と し て い の ち に
 彼 生 命 母 として 生 命

う つ し た ま え り 。
 移 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拜せられ、 萬物を無より有と

なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、

ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其 救 の爲に痛悔

た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾 に當然の伏拜讚榮を 奉 るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、 爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾 の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と體 と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て 爾 に務むるを得せしめ給え、聖なる

しょうしんぢよ こせい なんぢ よるこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より 爾 の喜 を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。
 こうえいはちちとことせいしん神にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。
 せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。
 救

誦經) ^{しゅ きび}主は^{われ ばつ}厳しく我を罰したれども、^{われ し わた}我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。
 救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた}主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り 。
 彼 我 救

【 使徒經 (アポストロス) 141 端 コリント前書 9 章 2~12 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん たつ}パウエルが^{ぜんしょ よみ}コリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい なんぢら しゅ おい われ しとしょく いん われ ぎ もの わ こた}兄弟よ、爾等は主に於て^{ところこれ}我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

^{われらあにくら の けん われらあにしまい つま たづさ た しとおよ しゅ}なり。我等豈^{けん}食^{けん}飲^{けん}むに權なきか。我等豈^{けん}姉妹なる妻を攜^{けん}うる^{けん}こと、他の使徒及び主の

^{けいてい およ}兄弟、及び^{けん}キファの如く^{けん}然る^{けん}權なきか。抑^{けん}獨^{けん}我と^{けん}ヴァルナヴァとは^{けん}工^{けん}作^{けん}せざる^{けん}權なきか。

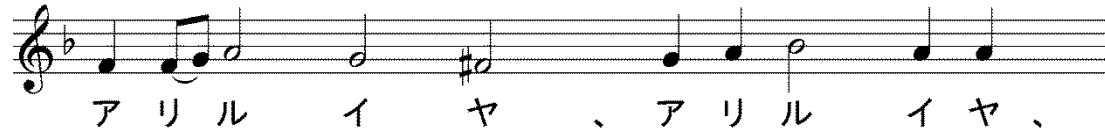
^{だれ ぐんし な}誰か^{けん}軍士と爲りて、己の^{けん}給^{けん}養^{けん}を以て^{けん}勤^{けん}むる^{けん}をせん。誰か^{けん}葡萄^{けん}を樹^{けん}えて、^{けん}其^{けん}果^{けん}を食^{けん}

^{だれ むれ ぼく}わざらん。誰か^{けん}群^{けん}を牧^{けん}して、^{けん}羣^{けん}の乳^{けん}を食^{けん}わざらん。我^{けん}唯^{けん}人^{けん}の情^{けん}に^{けん}循^{けん}いて^{けん}之^{けん}を^{けん}言^{けん}うか。

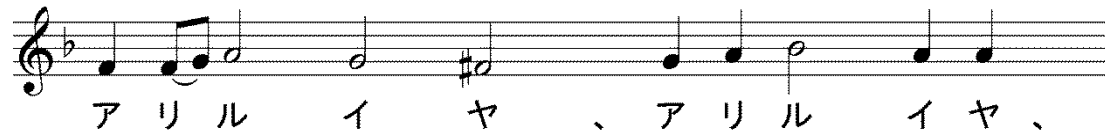
^{りつぼう またか い}律法も亦^{けん}斯^{けん}く^{けん}言^{けん}うに^{けん}非^{けん}ずや。蓋^{けん}モイセイの^{けん}律^{けん}法^{けん}に^{けん}録^{けん}して^{けん}云^{けん}く、^{けん}穀^{けん}物^{けん}を^{けん}踐^{けん}み^{けん}落^{けん}す^{けん}牛^{けん}には



誦經) 願ねがわくは主しゅは憂うれいの日ひに於おて爾なんぢに聴きき、イアコフの神かみの名なは爾なんぢを扨ふせぎ衛まもらん、



誦經) 主しゅよ、王おうを救すくえ、又また我われ等らが爾なんぢに呼よばん時とき、我われ等らに聴きき給たまえ、



司祭) (黙誦: 人ひとを愛あいする主しゅ宰さいよ、我わが心こころに神かみを知しる智ち慧えの浄いき光きを輝ひかりかし、我わが思し念ねん

め 目めを啓ひらきて、爾なんぢが福ふく音いんの教おしえを悟さとらしめ給たまえ、我わが衷うちに爾なんぢの福ふくたる 誠いましめを

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏おそる 畏おそれを 入いれて、我われらが 悉ことごとく の肉にく體たいの 慾よくを 踏ふみ、凡およそ 爾なんぢの 喜よろこぶ 所ところ

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を 思おもい 且かつ 行おこないて、屬ぞくしん 神せいの 生かつ活すを 過いたぐるを 致たまさせ 給けだしえ、蓋かみ ハリ スト ス 神かみよ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいぜん
爾なんぢは 我わが 靈たましい と 體からだ と の 光こう 照しょう なり、我われら等なんぢ と 爾なんぢ と 爾なんぢ の 無むげん 原ちち の 父しせい と 至せい 聖ぜん 至せい 善ぜん に し

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て 生いのち命ほどこを 施なんぢす 爾しんの 神こうえいと に 光けん 榮いを 獻いつず、今いまも 何いつ時よよも 世よよに、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 77 端 18 章 23~35 節 】

司祭) 睿えい智ち、肅つつし みて 立たて 聖せい 福ふく 音いん 經けいを 聴きく べし、衆しゅう 人じんに 平へい 安あん、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、天國は、其諸僕と會計せんと欲せ

し君王に似たり。會計を始めし時、一千万金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其

償うこと能わざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、

償わんことを命ぜり。其僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我盡

く爾に償わん。其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。其僕出でて、

一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾

が負う所を我に償え。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我

尽く爾に償わん。然れども、彼肯わず、乃往きて、其債を償うに至るま

で、之を獄に下せり。佗の同僚之を見て、甚憂い、來りて有りし所を悉く主に

告げたり。其時主は彼を召して曰く、悪しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債

を悉く爾に免せり、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非

ずや。主乃怒りて、其悉くの債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し爾

等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に

行わん。

(比較用 口語訳) 天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をし

めて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸 す。